

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K13230

研究課題名(和文)国際バカロレア日本語科目「歴史」のモデルカリキュラム・授業の開発

研究課題名(英文)Development of a Model Curriculum and the Lesson Plan of the International Baccalaureate Japanese Subject "History"

研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI, KENJI)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：40188355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバル人材の育成に対する要請が高まる今日の日本において、そのひとつの有効な方策として注目されるインターナショナル・バカロレア(IB)の普及・拡大に向け、IBプログラムの特徴である多様性への寛容、自律的判断等を中心に据えた新しい歴史教育のあり方の理論的検討と共に、多くの学校での導入を可能とするために、科目「歴史」のモデルカリキュラム・授業の開発を行った。グローバル人材育成の牽引役となるIB認定校やスーパー・グローバル・ハイスクールのみならず、それらを含むすべての日本の学校の歴史教育をグローバル社会で活躍できる資質・能力の育成に対応したものと改善することを図るものである。

研究成果の概要(英文)：Today, in Japan it is required to train personnel who can be active in global society. In this research, we aim to spread and expand International Baccalaureate (IB) which is attracting attention as one effective means. This research made a theoretical study on the idea of a new history education focusing on tolerance to diversity, autonomous judgment etc. which is the characteristic of the IB program. And in order to be able to introduce it in many schools, we developed a model curriculum and lesson plan of subject "History". This research aims to reform the history education of not only IB accredited schools and super-global high schools, but also all Japanese schools including them.

研究分野：教科教育学

キーワード：国際バカロレア IB ディプロマ・プログラム 歴史

1 . 研究開始当初の背景

20 世紀後半頃から政治・経済・情報・環境など様々な面でボーダレス化が進む状況の中で、学校の教員には、グローバル化が進展する社会で活躍できる人材を育てるような教育ができる資質・能力を身につけることが求められている。しかし、学校教育におけるグローバル人材育成を国際的に主導しているインターナショナル・バカロレア (I B) は、日本ではこれまで語学の壁が障害になって普及が十分進んでいなかった。そうした中、近年、日本における普及・拡大を図って I B ディプロマ・プログラム (D P) の一部科目が日本語でも可能になり、その普及・拡大が期待されている。

I B プログラムの特徴である多様性への寛容、自律的判断等を中心に据えた新しい歴史教育のあり方の理論的検討と共に、多くの学校で導入を可能とするためにモデルカリキュラム・授業の開発が喫緊の課題となっている。

2 . 研究の目的

本研究は、グローバル人材の育成に対する要請が高まる今日の日本において、そのひとつの有効な方策として注目される I B の普及・拡大に向けた新たな動きである日本語 D P の導入を受け、科目「歴史」のモデルカリキュラム・授業の開発を行うものである。それを通して、グローバル人材育成の牽引役となる I B 認定校やスーパー・グローバル・ハイスクールのみならず、それらを含むすべての日本の学校の歴史教育をグローバル社会で活躍できる資質・能力の育成に対応したものと改善することを図るものである。

3 . 研究の方法

本研究では、研究代表者およびその指示の下に研究協力者が、I B D P および日本国内の I B 認定校において実施されているカリ

キュラム・授業を調査・収集・分析し、そこから得られた I B の特徴を活かした日本語科目「歴史」のモデルカリキュラム・授業を開発する。具体的には、

- (1) I B プログラムの理論および実践に関する諸報告等を収集・分析し、そこにおいて育成する資質・能力とその論理ならびにカリキュラム・授業のあり方を明らかにする。
- (2) 日本国内の I B 認定校において実施されているカリキュラム・授業を調査・収集し、それらの特徴と課題を分析する。
- (3) 上記(1)(2)の成果に基づいて、日本語科目「歴史」のモデルカリキュラム・授業を開発する。

4 . 研究成果

(1) 先行実践の調査・分析

I B プログラムの特徴である多様性への寛容、自律的判断等を中心に据えた新しい歴史教育のあり方の理論的検討と共に、多くの学校で導入を可能とするためには、既に I B カリキュラムで授業を実施している学校の実践例を共有すると共に、さらに多くのモデルカリキュラム・授業の開発・蓄積が喫緊の課題となっている。それは、グローバル人材育成の牽引役となる I B 認定校やスーパー・グローバル・ハイスクールのみならず、それらを含むすべての日本の学校の歴史教育をグローバル社会で活躍できる資質・能力の育成に対応したものと改善することにも寄与することが期待されている。

本研究に於いては、日本国内の I B 認定校において実施されているカリキュラム・授業を調査・収集し、それらの特徴と課題を分析した。ここでは、調査の協力いただき、授業観察ならびにカリキュラムや授業開発の考え方等を教示いただいた学校名のみを挙げておく。(50 音順)

・ 沖縄尚学高等学校

- ・加藤学園附属暁秀高等学校
- ・玉川学園高等部
- ・東京学芸大学附属国際中等教育学校
- ・立命館宇治高等学校

(2)文献研究によるIB歴史の特徴の把握

IB機構の出版物ならびに先行研究の分析を行い、本研究では、IB歴史学習の特徴を、次のようにまとめ、単に過去の事実を学ぶということにはとどまらない歴史学習のひとつの在り方を示していると捉えた。

- ・歴史は、様々な史料の調査を通して、過去を記録し、再構成し、解釈するプロセスである。
- ・歴史を学ぶ生徒は、学問がどのように働くかを学ぶことが必要である。
- ・歴史研究には、データの選択と解釈ならびにその批判的評価の両方が含まれる
- ・学問としての歴史学の理解を促進すること。そこには、史料、方法および解釈の本質と多様性の理解と言うことを含む。
- ・過去についての批判的な熟考を通して、現在の理解を促進する。
- ・国家、地域および国際的なレベルで歴史的發展の影響の理解を促進する。
- ・様々な文化の歴史的経験の学ぶことを通して、自身の歴史的アイデンティティの自覚を発展させる。
- ・歴史学の方法論と実践への理解を深め、歴史的技能を習得することによって、学習した主題への理解を将来の歴史学習や関連領域に適用できるようになるよう促す。一般に、IB教育は、グローバルマインドをもった国際人の育成と評価されている。また、教科の学習のみならず、「課題論文」「知の理論」「創造性・活動・奉仕」が必修要件とされており、全人教育と評価されている。確かに、IB教育は、トータルでは“グローバル人材”“自主性をもって社会へ貢献する人材”といえる。しかし、歴史教

育の特徴を先日の通り捉えると、教科の学習は、それらを直接の目標とするのではなく、むしろ“科学的・学問的な思考の訓練”の場というべき性格が強く、それが間接的にトータルな目標達成の一端を担うことになっていると言えよう。

このようなIB歴史は従来の歴史教育とは異なった性格を有している。従来、歴史教育は日本、及び、多くの諸外国において、目的あるいは結果としてナショナル・アイデンティティの形成に寄与してきた。

社会について学ぶ教科・科目の中でも、特にナショナル・アイデンティティの形成の役割を強く担わされてきた「歴史」は、国境を越えた有効性が求められるIBカリキュラムの中で、どのようにしてその整合性を保っているのか？

IB「歴史」の提案する国境を越えて有効な歴史教育とは、次のようなものと捉えた。

- ・学習者の属する社会・国家自体の歴史的系譜をたどることではない
- ・対象となる社会・国家の如何にかかわらず適用できる歴史学の方法論を習得すること
- ・直接、学んだ事象の理解のみではなく、将来学ぶことにも適用できる技能で、歴史的・文化的背景の異なる社会・国家の理解が可能になる
- ・歴史学の訓練の場としてのトピック学習に、必要に応じて学習者の社会・国家も組み入れれば、ナショナル・アイデンティティ形成の役割も副次的には果たせ、各国独自の要請にも対応可能である

(3)世界史トピック単元の開発

近年、IBDPはカリキュラムを大きく変えた。2017年修了試験受験用の新しいカリキュラムでは、スタンダードレベルの「歴史」は、「指定学習項目」(40時間)、「世界史トピック」(90時間)、「歴史研究」(20時間)で

構成される。ハイレベルの「歴史」は、これに「地域選択項目」(90時間)が付加される。

本研究では、それらの構造や意義を検討した上で、「世界史トピック」のひとつの大単元を取り上げ、日本語で実施できるプランを作成した。

「世界史トピック」は、「社会と経済」「過渡期の社会」「近世の戦争の原因と結果」「冷戦：超大国間の緊張と対立(20世紀)」などIBが指定した世界史における主要12トピックの中からふたつのトピックを選択することが必修とされている。どのトピックを選択するかは、指定されておらず、組み合わせ次第で、例えば、近現代史中心といった特定の時代に焦点化したり、社会史、政治史といった特定の領域に焦点化したり、権力、紛争といった特定の概念に焦点化したりすることができる。カリキュラム設計者の歴史教育に対する考え方により、様々なアプローチが可能になるのである。

取り上げたトピックは、「独裁主義的国家(20世紀)」である。配当できる時間は約45時間見当であり、日本における一般的な歴史授業の単元のあり方と大きく異なる。

独裁主義的国家は、20世紀社会に大きな影響を与え、世界の変革をもたらした。加えて、独裁主義的国家は過去のものとはいえ、現在でも存在し、さらに未来においても存在・成立しうるものである。選択である「世界史トピック」において、本研究ではトピック「独裁主義的国家(20世紀)」を選択したのは、このような独裁主義的国家の歴史的意義と共に、以下のような特徴が、IB「歴史」の授業の本質を具体化しやすいと判断したことにもよる。

- ・「独裁主義的国家」には多様なタイプの独裁が存在すること
- ・「独裁」という概念自体が評価の分かれる論争的なテーマであること
- ・「独裁主義的国家」は歴史学者だけでなく、

政治学者も研究対象としており、様々な視点からの研究の蓄積が豊富であること

「世界史トピック」ではトピック毎に複数の事例をとりあげることが求められている。

「独裁主義的国家」では、異なる地域の独裁主義的国家の事例を少なくとも3つ取り上げ、各々における権力の出現、強化、維持について、また指導者の国内政策と外交政策が権力維持にどのような影響をもたらしたかについて探究する授業が求められている。

本研究で開発した単元案では、次の3つの事例を取り上げた。

- ・第一次大戦で疲弊したドイツで、ドイツ民族の優越性を唱え、軍国主義的秩序の再建、軍備の大拡張、民主共和制の転覆、経済の発展により国民の熱狂的支持を獲得してヨーロッパ制覇を目指したナチスドイツのヒトラー政権
- ・極端な原始共産制を目指して、知識人や反対勢力を徹底的に抹殺する圧政を敷いたカンボジアのポル・ポト政権
- ・旧宗主国の思惑や冷戦下における東西両陣営との関係が大きく影響したウガンダのアミン政権

3つの事例は、単に並列的に取り上げるのではなく、そこに類似性と相違点を見出すことを通して、子ども達が独裁主義的国家の本質や問題点などを考えるような構成とした。

本単元は、Part , Part , Part という3つの大きなまとまりで構成した。大単元を貫く問いである Research Question (RQ) となる「独裁主義的国家とは何か？」に答えるように探究を行う。

Part は、シミュレーション教材であり、個々の生徒の持っている独裁のイメージから独裁に必要な要素(テーマ)を抽出し、その要素(テーマ)を Key Question (KQ) で整理することで、独裁主義的国家を見る視点を獲得する段階である。本単元の KQ は KQ1「どのような要因・手法が独裁主義的国家の出現

に最も影響を与えたといえるか？」と KQ2「国内政策や対外政策が独裁主義的国家の強化・維持にどのように影響を与えたといえるか？」の2つを設定した。

前述の通り、IBでは権力の出現、強化・維持について、また指導者の国内政策と外交政策が権力維持にどのような影響をもたらしたかについて探究する授業が求められている。また、独裁主義的国家において、その成立前と成立後では行われた政策などの性格が異なっていることから、この2つのKQを探究させることはRQに答えるうえで重要となる。

Part は、ヒトラー、ポル・ポトそしてアミンの事例について、2つのKQに答える形で議論・事例解釈を行い、それぞれの事例の独裁像を形成する段階である。

Part は、独裁主義的国家の出現、強化・維持について、3つの事例の歴史解釈を比較することで、共通点・相違点を明確にし、独裁主義的国家の概念を形成する段階である。

このように、本題単元は、独裁主義的国家の分析視点の獲得 事例解釈 概念形成という学習のプロセスを取る。この3つの段階を経て、「独裁主義的国家とは何か？」という概念形成を子どもたち自身で行う。

大単元の中でこのような位置づけとなる3つのパートにおける探究過程の具体は、次の通りである。

Part は、独裁主義的国家を分析する視点を獲得する段階である。「独裁主義的国家の出現」と「権力の強化・維持」の2つの視点を獲得するために、シミュレーション教材を使用する。作成したシミュレーション教材は、実際の独裁主義的国家から抽出した要素で構成している。「独裁主義的国家を作るためには、どのようなことを行えば良いのだろうか？」という問いに対して、架空のシミュレーション世界において独裁主義的国家を作り上げる活動に個人・グループで取り組む。

問いに対する意見をグループで共有し、出てきた意見をカテゴライズする。そのカテゴライズしたものを、上述した2つの視点を使って時系列で分類する。ここで出てきた意見や時系列ごとの分類が事例学習を行う前の生徒の仮説となる。

Part では、まず、各事例の学習に入る前に、教科書や概説書を使って概観するとともに、学習する独裁のテーマを設定する。そこで設定した独裁のテーマごとに、グループで探究し、それをもとに発表・議論を行い、KQに答えるという学習過程をとる。

たとえばヒトラーを扱った学習では、教科書記述からヒトラー独裁の要素を抽出して、それらを探究で扱う独裁のテーマに設定する。設定されるテーマは、社会的背景、政治的要因、プロパガンダ、イデオロギーなどである。

続いて、班ごとに担当した要素（テーマ）についての資料を分析・解釈し、担当した要素（テーマ）が、「ヒトラーの独裁主義的国家の出現にどの程度影響を与えたのか」という視点でパワーポイントを作る。

さらに、各班の発表を基に「KQ1どのような要因・手法が独裁主義的国家の出現に最も影響を与えたといえるのか」についてクラスで議論する。ここでは、「各要素がどのように関係しているのか？」「なぜこの要因・手法が最も影響を与えたのか」ということを議論することが望ましい。議論の結果、出てきた答えが、クラスのKQ1に関するヒトラーの解釈となる。

このような活動を、KQ2「国内政策や対外政策が独裁主義的国家の強化・維持にどのように影響を与えたといえるのか？」においても行う。そして、他の2つの事例（ポル・ポト、アミン）においても同様に行う。そうすることで、ヒトラー、ポル・ポト、アミンのそれぞれの独裁主義的国家像を形成することとなる。

Part での活動では、第一に、3 事例を KQ ごとに比較し、第二に、独裁主義的国家の概念を定義する。

第一の活動である 3 事例を KQ ごとに比較することでは、KQ ごとに 2~3 班の探究グループを組織し、共通点や相違点を抽出し、KQ に対して答えを出す形で、歴史解釈を行う。それぞれの KQ について全体で発表、討論を行い、全体の意見を作り出す。

第二の活動である独裁主義的国家の概念を定義することでは、まずクラス全体で、政治学者の独裁主義的国家観を確認し、政治学者によってもその定義が様々であることを理解する。その上で、自分たちが学習してきた独裁主義的国家の各事例での議論を踏まえて、独裁主義的国家の概念形成を行う。最終的には、独裁主義的国家の定義についての全体での議論を終えた後に、個人で独裁主義的国家の定義を行うことで、生徒ひとり一人が歴史的事象を評価する能力を身につけていく。

歴史教育は、所属する社会への帰属意識育成の有効な手段として、洋の東西を問わず活用されてきたが、その問題性が指摘され、その克服のためのさまざまな研究とそれに基づく提案がなされてきた。本研究は、歴史教育改善の根拠をグローバル社会において求められる資質・能力の視点から構築し、それを実現するカリキュラム・授業という形で具体化することを試みた。本研究により、

- ・自らの所属する社会の優越観を植え付ける歴史教育からの根本的転換を図り、グローバル人材の育成に寄与ができる歴史教育のひとつのあり方の提案

- ・ I B 日本語認定校に必要なモデルの提供が、できたのではなからうか。

本研究の成果は、「広島大学・東広島市連携・教育フォーラム」(2016 年 10 月、広島大学)で提案発表をし、多くの教育実践者の

方々のご意見をいただいた上で、後述の通り全国社会科教育学会全国研究大会(2016 年 10 月、兵庫教育大学)で口頭発表した。

なお、本萌芽研究の成果を受けて、新たに基盤研究(A)として、引き続き「歴史」のカリキュラム・授業開発を続けると共に、新たに「科学」「言語と文学」「美術」の領域に於いて、同様の研究を行い、I B の理念を活かした授業のより広範囲で全体的な研究・提案を実施する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件)

棚橋健治ほか「国際バカロレア DP 日本語科目「歴史」の授業開発 世界史トピック「20 世紀の独裁主義的国家」」, 全国社会科教育学会 第 65 回全国研究大会 2016 年 10 月 9 日、兵庫教育大学(兵庫県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

棚橋 健治 (TANAHASHI KENJI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40188355